



十二国記プチオンリー「十二針路」記念

May 4, 2011

天山慶路・暁子

その朝、堂室に入ってきた人間が、室内を見渡しながらしばし思案した後、よし、おまえにしよう、とこちらに向かって手をさし出したとき、小さな鳥は期待で全身の羽根が膨らむのを感じた。

いよいよそのときがやってきたのだ。

金波宮の鸞と生まれて数ヶ月、一族が担う崇高な使命については、先輩の鳥たちから嫌と言うほど聞かされてきた。曰く、人語を身の裡に預かり、一語の間違ひもなく宛て先へ届けるためにこそ生を享けているのだということ。天から賜った特別なご加護により、陸海何処の空を飛ぼうとも、決して敵に襲われる心配はないこと。——余談ながら、大任を果たした後の一粒はまた格別であること。

とはいえ、生まれてこの方、梧桐宮の東殿から出たことはない。はてしない蒼穹というのがどんなものなのか、預かった言葉はどこにどう記憶すればいいのか、すべてが分からないことだらけだったが、先輩たちはくちばしを揃えて断言した。——そのときが来れば分かる。

かくて「そのとき」が来た、という訳なのだ。

——そして半刻後。小さな鸞は困惑していた。

言葉というのがどんなものなのかはすぐに分かった。それを記憶して蓄える方法も本能で分かった。だが問題は、目の前にいる金髪青年だ。声といい表情といい、思わずたじろぐほど冷淡で無愛想なのに、こうして両脚で掴んでいる指先からは、明らかに矛盾した正反対の感情が伝わってくるのだ。

「では、これにて失礼申し上げます。しわ寄せの政務が山積しておりますので」

そっけない締め括りの言葉とともに、金髪人は口を閉ざした。便りは間違いなく預かったのに、ちっとも満たされた気がしない。

——これで終わりなのか。本当にこれだけでいいのか。

精一杯の問いかけを込めて濃紫の瞳を覗き込んでみたが、不機嫌な沈黙が返ってきただけだった。



青い夏空の下、太陽を背にして北東に飛べと体内の羅針盤が命じていた。

風向きもよく、行く手には雨雲の影もない。途中、見るからに獐猛そうな鷹とすれ違ったときには身がすくんだが、相手はちらりと鋭い視線を投げてよこしただけで、別段襲ってこようとはしなかった。

低い山地を越えると、宛て先の気配が強くなった。小さな鸞は地上に目を凝らす。——細い河のように延びる街道、その先に行く赤い髪。あの少女だ。

頭上を旋回しながら呼びかけると、少女は空を振り仰いで目を睜り、すぐに笑顔になった。小さな鸞はほっとして、さし出された手の上に舞い下りる。翼ある身とはいえ、初めての飛行は結構気疲れする

ものなのだ。

「遠いところをご苦労さま。あちらはどんな風だ？ 景麒は元気にしてるか？」

それをこれから伝えようとしているのだから、どうか邪魔しないで欲しい。初の大役を背負った鸞の哀願を感じ取ってか、少女は真面目な面持ちになった。背負っていた雑嚢を降ろしてその上に腰かけると、心持ち姿勢を正して指先の鳥に向かい合う。

「これでよし。ええと……少し休まなくていいのか？ ——そうか。じゃ、どうぞ」



初仕事を無事に終え、小さな鸞が梧桐宮に帰り着いた後も、先輩の鳥たちが頻繁に借り出されては、青年と少女の間を往復したらしかった。そうしてひと月が経った頃、どんな偶然の賜物か、彼らが交わした最後の書簡は、再びこの小さな鸞に託されることになったのだった。

——よろしく。これが最後の便りだよ。

そう囁いて少女が送り出した鸞は、中秋節の準備に賑わう麦州の街を飛び立って、堯天山頂にある仁重殿の窓辺に舞い下りた。宛て先の姿は、書類が山積した書卓の前。前回のすげない態度が思い出され、呼びかけるのには勇気がいったが、意外にも金髪の人はい座に立ち上がり、小さな遠来の翼を抱き取ってくれたのだった。

——という訳で、もう寄り道はしないでまっすぐ帰ることにしました。帰る場所があって、待っていてくれる人がいるっていいものだね。初めて分かったような気がします。

預かってきた声で鳴きながら、小さな鸞は目を瞠った。目の前の人が、かすかな微笑を浮かべたように見えたのだ。それは以前、その指先から伝わってきた感情と同じ温かさを湛えていた。

最後まできちんとさえずり終えた喉元を、その人がそっと撫でてくれたとき、小さな鸞は生まれて初めて、自分の仕事というものを理解したように思ったのだった。——知らなかった。

人から人に想いを届けるということが、こんなにも誇らしく心満たされるものだったとは。

形の良い手の上で、明らかに余分に与えられた銀粒をついばみながら、小さな鸞は感謝の印に、携えてきた最後の一言をくり返す。まるで相手が目の前にいるかのように、心の籠った口調で話しかけてくれた、あの赤い髪の少女の声で。

——堯天までは、もうすぐです。

---

天山慶路 (管理人・暁子) <http://homepage3.nifty.com/tianshankeilu/top.htm>

十二国記・景陽小説サイト。オフラインでは年1回、5月のS C Cに新刊持参で参加しています。この小説はプチオンリー記念の書き下ろしで、上記サイト掲載作品『恋文』の番外編に当たります。企画の共通規定による字数制限のため、今回はぎりぎりまで字数を絞った(笑)ダイジェスト版を。  
いつかどこかで改めて完全版をお届けできれば…と思っています。